炭素および窒素同位体比分析による大阪湾の人工島に形成された 動物群集の食物網構造

米田佳弘1节, 金子健司2*, 松井光市3, 鈴木輝明4, 高倍昭洋5

Food web structure of animal communities formed on seawalls of artificial islands in Osaka Bay as determined by analyses of carbon and nitrogen stable isotope ratios

Yoshihiro Yoneda^{1†}, Kenji Kaneko^{2,*}, Koichi Matsui³, Teruaki Suzuki⁴ and Teruhiro TakaBe⁵

Coastal artificial structures are demanded for a consideration of environmental protection in recent years. Although gradually sloped seawalls were adopted in various parts of Japan, little is known on the food web of the community around such structures. In the present study, the food web and food source were estimated on the seawalls of artificial islands in Osaka Bay as determined by analyses of carbon and nitrogen stable isotopes. Clustering of δ^{13} C and δ^{15} N values of animals on the seawalls showed five feeding groups: fish, suspended feeders, suspended and surface deposit feeders, carnivores and herbivores. The dual isotope plot of δ^{13} C and δ^{15} N showed that the three food sources (phytoplankton, microbenthic algae and macrobenthic algae) were eaten by herbivores, suspended feeders, surface deposit feeders, and that these animals were ingested by carnivores and fish, both occupying the highest trophic levels.

Key words: food web, food source, stable isotope, coastal artificial structures, Osaka Bay

はじめに

海岸保全施設においては、生態系に配慮した構造物の設計 が求められ、様々な機能を持つ構造物が考案されている (例えば、横山ほか、2003; 三好ほか、2004; 三好ほか、2007; 村上ほか、2007).中でも緩傾斜護岸は直立護岸に代わっ て多くの護岸に採用され、藻場が形成されやすいことが報 告されている(明田ほか、1997; 寺脇ほか、1998; 阪上ほか、 2003).大阪湾南部に位置する海上空港である関西国際空 港においても、空港島護岸の多くに緩傾斜護岸が採用され ている.その護岸の機能を評価するために、1期空港島で は護岸が概成した1988年以降、2期空港島でも護岸が概成 した2001年以降、藻場、魚介類、底生動物に関するモニ タリング調査が継続的に実施されている(阪上ほか、 2003).その結果、海藻については移植されたカジメ Ecklonia cava やホンダワラ属褐藻 Sargassum spp.、およびワカメ Undaria pinnatifida やその他海藻により0.34 km²におよぶ大

3 新関西国際空港エンジニアリング株式会社

New Kansai International Airport Engineering Co., Ltd., 1 Senshu-kuko kita, Izumisano, Osaka 549-0001, Japan

Graduate School of Agricultural Science, Tohoku University, 1-1 Tsutsumidori-Amamiya, Aoba-ku, Sendai, Miyagi 981-8555, Japan

[†] E-mail: YonedaYo@mbox.pref.osaka.lg.jp

²⁰¹²年6月28日受付, 2013年7月16日受理

¹ 大阪府環境農林水産部水産課 Fisheries Division, Department of Environment, Agriculture, Forestry and Fisheries, Osaka Prefectural Government, 1–14–16 Nankokita, Suminoe-ku, Osaka, Osaka 559–8555, Japan

² 株式会社日本海洋生物研究所 Marine Biological Research Institute of Japan Co., Ltd., 3-9-2 Kobai-cho, Showa-ku, Nagoya, Aichi 466-0031, Japan

⁴ 名城大学大学院総合学術研究科

Graduate School of Environmental and Human Sciences, Meijo University, 1–501 Shiogamaguchi, Tempaku-ku, Nagoya, Aichi 468–8502, Japan ⁵ 名城大学総合研究所

Research Institute of Meijo University, 1–501 Shiogamaguchi, Tempaku-ku, Nagoya, Aichi 468–8502, Japan * 現住所:東北大学大学院農学研究科

阪湾で有数の規模の藻場が形成されていることが確認され ている.魚類については、1期空港島で40種、2期空港島で 45種の出現が報告され、マナマコ Apostichopus armata やム ラサキウニ Anthocidaris crassispina 等の多くの有用魚介類 の生息も確認されていることから、大阪湾の生物多様性の 確保や魚介類の産卵場、生育場として機能している可能性 がある(阪上ほか、2003).しかし、大阪湾の海上に造成 された護岸に形成されたこれらの動物群集がどのような食 物源を利用し、どのような食物網構造により成立している のかについては未解明である.これを明らかにすること は、関西国際空港の護岸の生物生産機能や水質浄化機能の 評価、および今後実施される新たな人工島の造成あるいは 環境修復として新たな生態系の創出を行う場合に重要な知 見となる.

そこで我々は,関西国際空港の空港島護岸に形成された 動物群集の炭素および窒素の安定同位体比(δ¹³C,δ¹⁵N)を 調べることにより,食物網構造を把握したので報告する.

材料と方法

調査地点

調査地点は大阪湾泉州沖5kmに造成された関西国際空港の1期空港島(以降,1期島と呼ぶ)である(Fig.1).造 成海域の平均水深は18.0mであり,護岸は1988年12月に 概成した.

1期島は幅1,250 m,長さ4,370 mであり,護岸は主に緩 傾斜護岸と直立護岸で構成されている.直立護岸は北東側 護岸に採用され,それ以外の護岸は傾斜部と水平部からな る緩傾斜護岸である.1期島造成後約11年が経過した1999年 の藻場の観察では,直立護岸で33種,湿重量で88 g·m⁻², 南東側の緩傾斜護岸で71種,湿重量で1,740 g·m⁻²の海藻 が出現し,直立護岸では緑藻類と紅藻類,緩傾斜護岸では 紅藻類と褐藻類が主に出現している(尾崎ほか,2000). 南東側の緩傾斜護岸では藻場は水深約7 mまでみられ,全



Figure 1. Map showing the study site.

体的に小型多年生紅藻類が優占するが,浅所にはホンダワ ラ属褐藻,ワカメ等も多くみられ,深所に向かうにつれ, カジメ属褐藻が増加する(金子ほか,2007).

試料の採集

2001年9月6日から2002年9月30日にかけて,および2011 年3月9日から11日にかけて1期島周辺海域において海藻 と動物の試料の採集を行った(Fig.1).

海藻については, 護岸に繁茂する代表的な海藻類を試料 とした.

動物試料については、メガベントス(目視で容易に観察 できる大型の移動性の動物)およびマクロベントス(被覆 石等に付着する動物やそこに生息する小型の移動性の動 物)とした.また、動物プランクトンと予備調査において 現存量の多かった魚類も試料とした(Table 1).

海藻,メガベントス、マクロベントスの採集は、1期島 の北東側護岸(NE)、南東側護岸(SE)、および南西側護 岸(SW)においてスキューバにより行った(Fig.1).海藻 とメガベントスは直接採集し、マクロベントスは、護岸の 被覆石の付着物を枠取りし、船上で選別し採集した. 試料 は各生物の現存量の多い護岸および水深から採集した.

動物プランクトンについては、北原式プランクトンネット(網目幅100 µm)を用いて、1期島近傍の海域において、海底面上0.5 mから海面まで鉛直曳きを行った. 試料は燃 焼済みのWhatman GF/Cガラスファイバーフィルタにより 吸引濾過した.

魚類についても、NE, SE, およびSWにおいて釣りにより 採集した. さらに、空港島周辺海域で操業していたパッチ 網で得られたカタクチイワシEngraulis japonicus およびイ カナゴ Ammodytes personatus の稚魚も試料とした.

すべてのサンプルは分析に供するまで-30℃で凍結保 存した.

安定同位体比の測定

安定同位体比の測定部位は、ウニ類については生殖腺、マ ナマコおよびアカナマコ Apostichopus japonicus については 体壁、魚類および貝類については筋肉、それ以外の動物に ついては体全体、海藻類については葉状部とした。

メガベントス,マクロベントスおよび魚類は凍結乾燥し た後,粉末にし,クロロホルム-メタノール(2:1)溶液で 脱脂した.海藻は表面の付着物を取り除いた後,60°Cで乾 燥し粉末にした.動物プランクトン試料については塩酸処 理により炭酸塩を除去した.各試料の δ^{13} Cおよび δ^{15} N値の 測定には元素分析計(FLASH 2000, Thermo Fisher Scientific) に接続した質量分析計(DELTA V Advantage, Thermo Fisher Scientific)を用いて測定した.本分析システムの分析精度 は δ^{13} C, δ^{15} Nともに±0.15‰以下である.ただし,一部の 測定は,元素分析計(NA-1500, Fisons)に接続した質量分 析計(MAT DELTA Plus, Finnigan)を用いた.本分析シス テムの分析精度は δ^{13} Cが±0.1‰以下, δ^{15} Nが±0.2‰以下で

Table 1.	Stable carbon	$(\delta^{13}C)$	and nitrogen	$(\delta^{15}N)$	isotope values	$(\%, mean \pm Sl$)).

General group	Species	Japanese name	Abbreviation	$\delta^{13}C\pm SD$	δ^{15} N±SD	п	Date
Macroalgae							
Rhodonhyceae	Chondrus sp	Tsunomata	Rh-1	-161 ± 12	9.3 ± 0.2	3	Mar 2011
renouophyceue	Gelidium elegans	Makusa	Rh-2	-14.3 ± 0.6	10.6 ± 0.7	3	Mar. 2011
	Gracilaria textorii	Kabanori	Rh-3	-15.7 ± 0.3	9.8±0.5	3	Mar. 2011
Phaeophyceae	Ecklonia kurome	Kurome	Ph-1	-15.1 ± 0.6	10.7±1.1	3	Mar. 2011
1 2	Sargassum horneri	Akamoku	Ph-2	-15.7 ± 2.3	9.2±0.4	3	Mar. 2011
	Undaria pinnatifida	Wakame	Ph-3	-13.6 ± 0.4	9.5±0.2	3	Mar. 2011
Zooplankton			ZP	-18.6 ± 0.3	12.8±0.2	4	Sep. 2002
Mollusca							Mar. 2011
Polyplacophora	Acanthopleura japonica	Hizara-gai	Ро	-12.1 ± 0.3	14.9±0.1	3	Mar. 2011
Bivalvia	Arca boucardi	Koberuto-funegai	B-1	- 16.8	12.7	2	Mar. 2011
	Mytilus galloprovincialis	Murasaki-igai	В-2	-16.8 ± 0.3	11.9±0.2	3	Mar. 2011
	Ostreidae	Itabogaki-ka	В-3	-15.3 ± 0.2	12.7±0.3	3	Mar. 2011
Gastropoda	Nassariidae	Oriireyofubai-ka	G-1	-12.9	15.7	2	June 2002
	Thais bronni	Reishi-gai	G-2	-13.3 ± 0.2	15.3±0.7	3	Mar. 2011
	Turbo cornutus	Sazae	G-3	-15.2 ± 0.3	11.4±0.1	3	June 2002
Polychaeta							
	Cirriformia tentaculata	Mizuhiki-gokai	P-1	-18.1 ± 0.4	12.4±0.4	3	Sep. 2002
	<i>Glycera</i> sp.	Chirori-zoku	P-2	- 13.5	15.5	2	June 2002
	Nereididae	Gokai-ka	P-3	-17.0 ± 1.8	14.3±0.2	3	Sep. 2002
	Polynoidae	Urokomushi-ka	P-4	-16.8 ± 0.5	14.2±0.6	3	Sep. 2002
	Terebellidae	fusa-gokai-ka	P-5	-17.2 ± 0.5	13.3±0.5	3	Sep. 2002
Arthropoda							
Maxillopoda Malacostraca	Megabalanus rosa	Aka-fujitsubo	М	-16.5 ± 0.2	15.1±0.2	3	Mar. 2011
Amphipoda	Caprella penantis	Maruera-warekara	Am-1	-16.3	12.0	2	Mar. 2011
I I	Hvalidae	Mokuzu-vokoebi-ka	Am-2	-13.9 ± 0.5	14.1±0.4	3	Mar. 2011
Decapoda	Alpheus sp.	Teppou-ebi-zoku	D-1	-14.2 ± 1.5	14.6±0.5	3	Sep. 2002
1	Hippolytidae	Mo-ebi-ka	D-2	-14.1 ± 0.9	14.5±0.8	4	Sep. 2002
	Pilumnus minutus	Himekebuka-gani	D-3	-11.4 ± 1.3	13.7±0.4	3	Sep. 2002
	Pugettia quadridens	Yotsuhamo-gani	D-4	-12.0 ± 0.5	12.9±0.3	3	Sep. 2002
	Thalamita sima	Futababenitsuke-gani	D-5	-13.7 ± 0.4	13.5±0.2	4	Sep. 2002
Echinodermata							
Echinoidea	Anthocidaris crassispina	Murasaki-uni	E-1	-13.1 ± 0.1	11.2±0.5	3	June 2002
	Hemicentrotus pulcherrimus	Bafun-uni	E-2	-14.3 ± 0.8	11.4±0.2	3	June 2002
Holothuroidea	Apostichopus japonicus	Aka-namako	H-1	-14.8 ± 0.4	14.5±0.4	3	Mar. 2011
	Apostichopus armata	Ma-namako	H-2	-15.0 ± 0.3	13.2±0.6	3	Mar. 2011
	Synaptidae	Ikari-namako-ka	H-3	-14.0	13.3	2	June 2002
Chordata							
Ascidiacea	Halocynthia roretzi	Ma-boya	As	-17.8 ± 0.2	13.6±0.7	3	Mar. 2011
Vertebrata							
Fish							
Adult	Acanthopagrus schlegelii	Kurodai	F-1	-14.1	17.0	2	Mar. 2011
	Chromis notata	Suzumedai	F-2	-14.5 ± 0.4	16.2±0.0	3	Sep. 2002
	Lateolabrax japonicus	Suzuki	F-3	-14.8 ± 0.5	18.0±0.3	6	Sep. 2001
	Rudarius ercodes	Amimehagi	F-4	- 15.5	13.7	2	Sep. 2002
	Sardinops melanostictus	Ma-iwashi	F-5	-15.1 ± 0.5	16.0±0.5	3	Sep. 2002
	Sebastes inermis	Mebaru	F-6	-15.6 ± 0.4	16.8±0.3	6	Sep. 2001
	Sebastiscus marmoratus	Kasago	F-7	-13.8 ± 0.3	17.5±0.2	6	Sep. 2001
	Trachurus japonicus	Ma-aji	F-8	-15.2 ± 1.3	16.5±0.6	6	Sep. 2002
Juvenile	Ammodytes personatus	Ikanago (Juveniles)	Fj-1	-16.2 ± 0.1	14.9 ± 0.2	3	Mar. 2011
	Engraulis japonica	Katakuchi-iwashi (Juveniles)	Fj-2	-16.0 ± 0.5	15.3±0.3	6	Sep. 2002

ある.安定同位体比は標準試料から千分偏差で以下のよう に示される.

 δ^{13} C, δ^{15} N = [($R_{\text{sample}}/R_{\text{standard}} - 1$)]×1000

 R_{sample} :分析試料の¹³C/¹²C, ¹⁵N/¹⁴N, $R_{standard}$:標準試料の¹³C/¹²C, ¹⁵N/¹⁴N, δ^{13} Cと δ^{15} Nの標準試料はそれぞれ世界標準物質である PDB(Peedee 層産ベレムナイト化石)と大気中の窒素である.

また,各動物の安定同位体比 δ¹³C, δ¹⁵N についてクラス ター分析を行うことで食性のグループ化を行った.分析の 際,δ¹³C,δ¹⁵Nをそれぞれ標準化し,結合距離にはユークリッ ド距離を,結合方法にはウォード法をそれぞれ用いた.

結 果

安定同位体比

各試料の δ^{13} C, δ^{15} NはTable 1の通りである.海藻の δ^{13} Cは -16.1から-13.6‰, δ^{15} Nは9.2から10.7‰の範囲にあり, 動物プランクトンの δ^{13} Cは-18.6‰, δ^{15} Nは12.8‰であった.

動物群集は δ^{13} C, δ^{15} Nのクラスター分析の結果,5つの グループと9のサブグループに大別された(Fig.2).

各グループの位置関係についてみると (Fig. 3), δ^{13} Cで は、グループAが-18.1から-16.0%と最も低く、動物プ ランクトンよりやや (0.5から2.6%) 高かった程度であっ たのに対して、グループEでは-13.5から-11.4%と、動



Figure 2. Cluster analysis dendrogram of δ^{13} C and δ^{15} N for organisms in the community on the seawalls in Kansai international airport using Ward's method.

物プランクトンよりも5.1から7.2‰も高く,海藻の範囲よ りも高かった.グループB, D, Cは,それぞれ-15.6から -13.8‰,-15.5から-13.7‰,-15.2から-13.1‰であり, グループA, Eのほぼ中間的な値であった.

 δ^{15} Nでは、グループCが11.2から11.4‰と最も低く、動物プランクトンよりも1.5‰程度低く、海藻よりも0.5から 2.2‰程度高かったのに対して、グループBでは16.0から 18.0‰と最も高く、動物プランクトンよりも3.2から5.2‰ 高かった。グループA, D, Eは、それぞれ11.9から15.3‰, 12.7から14.6‰, 12.9から15.7‰であり、グループC, Bの ほぼ中間的な値であった。グループDの δ^{13} Cと δ^{15} Nは他 の4グループのほぼ中間的な値であり(δ^{13} C: -15.5から -13.7‰, δ^{15} N: 12.7から14.6‰)、 δ^{13} Cは海藻と δ^{15} Nは動 物プランクトンとそれぞれ同程度であった。

グループごとに内訳をみると、グループCは δ^{13} Cが-15.2 から-13.1‰、 δ^{15} Nが11.2から11.4‰程度の範囲にあり、 ムラサキウニ、バフンウニ*Hemicentrotus puicherrimus*、サ ザエから構成され、海藻よりも δ^{15} Nが高く、 δ^{13} Cについ てはほぼ同じ範囲にある.

グループAは多様な分類群から成り、 δ^{13} Cと δ^{15} Nの値の 大きいアカフジツボ*Megabalanus rosa*, イカナゴおよびカタ クチイワシ*Engraulis japonicus*の稚魚、ゴカイ科 Nereididae およびウロコムシ科 Polynoidaeの多毛類から構成される A-I(δ^{13} C: -17.0から-16.0‰、 δ^{15} N: 14.2から15.3‰), δ^{13} Cの値が小さいマボヤ*Halocynthia roretzi*, ミズヒキゴカイ *Cirriformia tentaculata*およびフサゴカイ科 Terebellidae多毛 類から構成される A-II(δ^{13} C: -18.1から-17.2‰, δ^{15} N: 12.4から13.6‰), δ^{13} Cが高く, δ^{15} Nの小さいコベルトフネ ガイ*Arca boucardi*, ムラサキイガイ*Mytilus galloprovincialis*, マルエラワレカラ*Caprella penantis*から構成される A-III



Figure 3. Dual isotope plot of δ^{13} C and δ^{15} N for organisms in the community on the seawalls in Kansai international airport. Abbreviations indicate species which are shown in Table 1. Groups A–E are feeding groups which were determined by the cluster analysis in Fig. 2. A dark area shows the range of the macroalgae.

(δ¹³C:-16.8から-16.3‰, δ¹⁵N:11.9から12.7‰)の3つ のサブグループに区分された.

グループDは δ^{13} Cと δ^{15} Nの値が相対的に大きいテッポ ウエビ属*Alpheus* sp., モエビ科Hippolytidae, フタバベニツ ケガニ*Thalamita sima*の十脚類, アカナマコおよびイカリ ナマコ科Synaptidaeのナマコ類, モクズヨコエビ科Hyalidae のヨコエビ類から構成されるD-I(δ^{13} C:-14.8から-13.7‰, δ^{15} N:13.3から14.6‰)とマナマコ, イタボガキ科Ostreidae の二枚貝類, アミメハギ*Rudarius ercodes* から構成される D-II(δ^{13} C:-15.5から-15.0‰, δ^{15} N:12.7から13.7‰) の2つのサブグループに区分された.

グループEは相対的に δ^{13} Cが低く、 δ^{15} Nが大きいオリイ レヨフバイ科 Nassariidae, レイシガイ Thais bronniの腹足 類, チロリ属 Glycera sp.の多毛類から構成される E-I (δ^{13} C: -13.5から-12.9‰, δ^{15} N: 15.3から15.7‰)と、逆に相対 的に δ^{13} Cが高く、 δ^{15} Nが小さいヒメケブカガニ Pilumnus minutus, ヨツハモガニ Pugettia quadridens の十脚類とヒザ ラガイ Acanthopleura japonica から構成される E-II (δ^{13} C: -12.1から-11.4‰, δ^{15} N: 12.9から14.9‰)の2つのサブ グループに区分された.

グループBは魚類の成魚が分類され、 δ^{13} Cと δ^{15} Nの値 の大きいスズキLateolabrax japonicus, カサゴ Sebastiscus marmoratus, クロダイ Acanthopagrus schlegelii (δ^{13} C: -14.8 から-13.8‰, δ^{15} N: 17.0から18.0‰)から構成されるB-I と値の小さいメバル Sebastes inermis, スズメダイ Chromis notata, マイワシ Sardinops melanostictus, マアジ Trachurus japonicus (δ^{13} C: -15.6から-14.5‰, δ^{15} N: 16.0から16.8‰) から構成されるB-IIの2つのサブグループに区分された.

考察

安定同位体比のクラスター分析の結果、関西国際空港の護 岸の動物群集は、5つのグループと9のサブグループに分類 された.これらの各グループの食物の起源を推定するた め、¹³Cと¹⁵Nの濃縮係数をそれぞれ1.0 (DeNiro and Epstein, 1978) および 3.4 (Minagawa and Wada, 1984) とし、植物プ ランクトン、海藻、および底生微細藻類起源の食物を摂食 した動物の安定同位体比の予測値あるいは範囲を示すと Fig. 4のようになる. ここでは, 植物プランクトンのδ¹³C およびδ¹⁵Nは大阪湾湾央の表層と10m層で観測された懸 濁物(0.7から15μm)の値の平均値-21.7‰および9.2‰ (Meksumpun et al., 1998) を用い, 底生微細藻類の δ^{13} Cおよ びδ¹⁵Nは広島湾の石面付着有機物(0.7から125 μm)の値 の平均値-15.4‰および8.4‰ (Takai et al., 2002b) を用い た. この図から、
る¹³Cが大きいほど、海藻や底生微細藻類 の底生系の食物源を利用しており、小さいほど植物プラン クトンを起源とする浮遊系の食物源を利用していることは 明らかである. この範囲から推測すると、グループAおよ びBは浮遊系と底生系の食物源の両方を利用し、グループ



- **Figure 4.** Range of dual isotope plot of δ^{13} C and δ^{15} N for feeding groups and expected food sources taking trophic enrichment into consideration in the community on the seawalls in Kansai International Airport. Groups A–E are feeding groups, which were determined by the cluster analysis. Solid lines show expected δ^{13} C and δ^{15} N of organisms feeding phytoplankton and benthic microalgae, respectively. A dark area shows range of expected δ^{13} C and δ^{15} N of organisms feeding macroalgae. Filled circle and triangle denote δ^{13} C and δ^{15} N of phytoplankton and benthic microalgae cited from Meksumpun et al. (1998) and Takai et al. (2002b), respectively.
- C, D, Eは底生系の食物源を主に利用していることになる.

各グループの食性について検討すると、δ¹³Cが最も小さ いA-IIは動物プランクトンと近い位置にあることから (Fig. 3), 植物プランクトンのような海水中の細かい懸濁 態粒子あるいは海底表面に堆積した細かい有機物を摂食す るグループであると考えられる.構成種には、懸濁物食者 であるマボヤ、および表層堆積物食者であるフサゴカイ科 およびミズヒキゴカイ科多毛類 (Fauchald and Jumars, 1979) が含まれることとも一致する. A-IはA-IIよりもδ¹⁵Nが高 く、アカフジツボ、イカナゴおよびカタクチイワシの稚魚 で構成されることから、A-IIよりも大きい懸濁態粒子を摂 食していることが推測される.一方、A-IIよりも δ^{13} Cの大 きいA-IIIやD-IIにも、コベルトフネガイ、ムラサキイガ イ、イタボガキ科の二枚貝類という明らかな懸濁物食者が 含まれている一方, D-IIには表層堆積物食者とされるマナ マコ (五嶋, 2012) も含まれていた. このことから、それ らの懸濁物食者は海水中の植物プランクトンよりも海底か ら巻き上がった底生微細藻類や海藻起源のデトライタスの 影響を強く受けていると考えられる. さらに、テッポウエ ビ属、フタバベニツケガニ等の十脚類、アカナマコが含ま れるD-Iや肉食者であるレイシガイ等の腹足類, チロリ属 の多毛類から構成されるE-IはD-IIよりもδ¹³Cが大きいこ とから、さらに底生系起源の食物の影響を強く受けている と推測される. 最も大きいδ¹³Cを示したE-IIは, 海藻や底 生微細藻類起源から想定される範囲よりもδ¹³Cが大きかっ

た. このグループにはヒメケブカガニ, ヨツハモガニ, ヒ ザラガイが含まれていた. ヨツハモガニはアワビの稚貝の ような小型の貝類を摂食し (干川, 2003), ヒメケブカガ ニが属するオウギガニ科のカニ類も, カサガイ類等を摂食 することが報告されている (富川・渡邊, 1990). アワビ の稚貝は底生微細藻類 (岡部, 1982), カサガイ類は底生 微細藻類, 海藻, 小型甲殻類等を摂食することから (Latyshev et al., 2004), 底生微細藻類がE-IIの動物群の主な食物源に なっていることが推察される. したがって, ここでは底生 微細藻類の *δ*¹³C について広島湾の値を用いて検討したが, 本調査地点の底生微細藻類の *δ*¹³C が広島湾のものよりも 大きな値である可能性が考えられる.

δ¹⁵Nが最も大きい魚類で構成されるグループBは海藻や 底生微細藻類起源に近く(Fig. 4),底生系の食物源の割合 が高いことを示しているが、B-IIはメバル、マアジ等から 構成されることから、アミ類等の大型のプランクトンを摂 食するグループと考えられる. さらに、B-Iは魚類等の大 型動物を摂食するスズキやカサゴから構成されることか ら, A-II, A-I, B-II, B-Iという流れは, 主に浮遊系の食物が 高次の栄養段階の魚類へつながる流れであると解釈され る。高次になるにつれて底生系の食物源の割合が高くなっ たことは、空港等周辺海域の魚類は、浮遊系起源の食物と ともに底生系起源の食物も利用していることを示唆してい る.実際にB-IIに属するメバルの胃内容物からはアミ類や カイアシ類とともに多毛類の出現が確認されており(関西 国際空港株式会社,未発表), B-Iに属するカサゴがδ¹³C の大きいヒメケブカガニ (-11.4‰)を多く摂食している ことも報告されている(日下部ほか, 2005).ただし、本 研究では動物を脱脂したが,脱脂を行うことでδ¹³Cが高 くなること、および筋肉のδ¹³Cは他の部位と比較して高 くなることから (Yokoyama and Ishihi, 2006), 特に筋肉部 を試料とした魚類と貝類で濃縮係数が実際よりもやや大き く見積もられ、底生系の食物が若干過大評価されたことも 影響している可能性がある.

大阪湾を含む瀬戸内海の δ^{15} N値は外洋に面した沿岸域 よりも同一種でも大きい値を示すことが知られており,都 市排水起源の¹⁵Nに富んだ窒素の影響が原因であると考え られている(Takai et al., 2002a).さらに,瀬戸内海の中で も δ^{15} N値に海域間で違いが認められる例が報告されてい る(高井, 2005).安定同位体比に関する研究例が豊富な 広島湾と本研究結果を比較してみると,海藻では本研究の 測定範囲9.2から10.7‰に対し,7.0から12.0‰(測定した 種の94%,高井ほか,2001),懸濁物食者では本研究のマ ボヤの13.6‰に対しシロボヤ*Styela plicata*の13.4‰(Takai et al., 2002b),本研究のイタボガキ科の12.7‰に対しマガ キ*Crassostrea gigas*の11.0から12.9‰(Takai et al., 2002b), 魚類では本研究のマアジの16.5‰に対し16.0‰(Takai et al., 2002b),本研究のクロダイ17.0‰に対し16.6‰(藤田ほか, 2011)とほぼ同様の値を示した.このように大阪湾と広島 湾が類似したδ¹³Cおよびδ¹⁵N値を示すことは、大阪湾と 広島湾の都市排水の影響が強いという類似した環境を反映 した結果と考えられる.

以上の解釈から,空港島護岸の食物網構造を推察する と、Fig.5のようになる.空港島護岸の動物群集の食物源 は周辺海域から供給される植物プランクトン、護岸上で生 産される底生微細藻類と海藻の3つがあり、それを利用す る懸濁物食者、表層堆積物食者、海藻食者、および肉食者 を通じて、最終的に最も高次の魚類につながっている構造 と考えられる.また、空港島は大阪湾泉州沖5km沖の平 均水深18mの海上に造成されたにも関わらず,底生微細 藻類や海藻起源の寄与が意外にも大きいことが推察され た.このことは、空港島護岸の多くが緩傾斜護岸で構成さ れているため,緩傾斜護岸上で生産された底生微細藻類や 海藻起源のデトライタスの巻き上げなどの物理過程を通じ て、動物群集の生産に大きく寄与している可能性を示唆し ている. 今後は、動物群集の食物の供給源としての緩傾斜 護岸の重要性を評価するために、緩傾斜護岸上での海藻や 底生微細藻類の生産量も別途算出し, それが空港島の動物 群集の現存量にどの程度利用されているのかについても検 討を加える.また、直立護岸と緩傾斜護岸といった護岸別 の機能を評価するために、各護岸において藻場や動物群集 の現存量を明らかにし、さらにその起源を定量的に見積も ることで、動物群集の現存量や食物源が、護岸構造の違い、 あるいは波あたりの強さ等の環境の違いによってどのよう に異なるのかについても検討する予定である.



Figure 5. Community structure on the seawalls of Kansai International Airport Islands in Osaka Bay. SF and SDF show suspension feeders and subsurface deposit feeders, respectively. Groups A–E are feeding groups, which were determined by the cluster analysis. Arrows show food chain between feeding groups. Dotted arrows show indirect food chain. δ^{13} C and δ^{15} N of phytoplankton and benthic microalgae are cited from Meksumpun et al. (1998) and Takai et al. (2002b), respectively.

謝 辞

本調査を実施するにあたりご協力頂いた関西国際空港株式 会社,ならびに試料の採集にご協力頂いた株式会社シャ トー海洋調査の各位に感謝いたします.

引用文献

- 明田定満・山本泰司・小野寺利治・鳴海日出人・斉藤二郎・谷野 賢二(1997)複断面構造を有する港湾構造物への海藻群落形 成について.海岸工学論文集,44,1131–1135.
- DeNiro, M. J. and S. Epstein (1978) Influence of diet on the distribution of carbon isotopes in animals. Geochim. Cosmochim. Acta, 42, 495– 506.
- Fauchald, K. and P. A. Jumars (1979) The diet of worms: A study of polychaete feeding guilds. Oceanogr. Mar. Biol. Ann. Rev., 17, 193–284.
- 藤田辰徳・海野徹也・斉藤英俊・小櫃剛人・徳田雅治・奥 宏海・ 吉松隆夫・石丸恵利子・陀安一郎(2011)広島湾における天 然クロダイの筋肉成分の季節変化.日水誌,77,1034-1042.
- 五嶋聖治(2012)第2章 生態.「ナマコ学―生物・産業・文化―」 高橋明義,奥村誠―共編,成山堂書店,東京, 19–34.
- 干川 裕 (2003) エゾアワビ人工種苗に対するヒトデ類3種および ヨツハモガニの捕食(室内実験).北水試研報, 64, 121–126.
- 金子健司・豊原哲彦・藤田種美・米田佳弘・中原紘之(2007)大 阪湾の人工護岸に形成された海藻群落の維持と高密度に生息 するウニ類の摂食活動.日水誌, 73,443-453.
- 日下部敬之・有山啓之・大美博昭・天野玉雄(2005) 関西国際空 港人工傾斜護岸と自然岩礁海岸におけるカサゴ成魚の摂餌生 態の比較.日水誌, 71,594-600.
- Latyshev, N. A., A. S. Khardin, S. P. Kasyanov and M. B. Ivanova (2004) A study on the feeding ecology of chitons using analysis of gut contents and fatty acid markers. J. Mollus. Stud., 70, 225–230.
- Meksumpun, S., C. Meksumpun, A. Hoshika, Y. Mishima and T. Tanimoto (1998) Stable isotope technique for evaluation of organic matter movement and coastal environment status. In D. Almorza and H. M. Ramos (eds), Applied Sciences and the Environment. WIT Press, Southampton, 189–204 pp.
- Minagawa, M. and E. Wada (1984) Stepwise enrichment of ¹⁵N along food chains: Further evidence and the relation between ¹⁵N and animal age. Geochim. Cosmochim. Acta, 48, 1135–1140.

三好順也・上月康則・森 正次・亀田大悟・矢間北斗・倉田健悟・

村上仁士(2004)岸壁付帯式テラス型海岸構造物によるムラ サキイガイ由来の汚濁負荷削減効果.海洋開発論文集,20, 1061-1066.

- 三好順也・上月康則・村上仁士(2007)大阪湾奥部における自律 的環境修復を促す護岸付帯式海岸構造物の機能評価.日本海 水学会誌, 61, 331-336.
- 村上仁士・水口裕之・上月康則・伊福 誠・野田 厳・岩村俊平・ 山本秀一(2007)エコシステム式海域環境保全工法を導入し た直立構造物の環境配慮機能の評価.海岸工学論文集,54, 1281-1285.
- 岡部三雄(1982)アワビ初期稚貝の硅藻摂餌量について(短報). 京都海洋センター研報, 6,53-54.
- 尾崎正明・伊藤利加・奥田泰永・二宮早由子(2000) 関西国際空 港島護岸の藻場造成による環境創造効果について.海岸工学 論文集.47,1196-1200.
- 阪上雄康・浅山英章・北澤壮介(2003)関西国際空港2期空港島に おける藻場造成について.海洋開発論文集,19,13-18.
- 高井則之(2005)瀬戸内海の生態系解析における有機物質フロー の指標としての炭素・窒素安定同位体比.日本生態学会誌, 55.269-285.
- 高井則之・星加 章・今村賢太郎・萬 明美・谷本照巳・三島康史 (2001)広島湾における海藻の炭素・窒素安定同位体の分布特 性.日本生態学会誌, **51**,177–191.
- Takai, N., Y. Mishima and A Hoshika (2002a) Habitat use and trophic positions of kobi Squid *Loliolus sumatrensis* in the western Seto Inland Sea in late spring inferred from carbon and nitrogen stable isotope ratios. Bull. Jpn. Soc. Fish. Oceanogr., 66, 1–10.
- Takai, N., Y. Mishima, A. Yorozu and A. Hoshika (2002b) Carbon sources for demersal fish in the western Seto Inland Sea, Japan, examined by δ^{13} C and δ^{15} N analyses. Limnol. Oceanogr., **47**, 730–741.
- 寺脇利信・吉田吾郎・玉置 仁・薄 浩則(1998)広島湾の石積 み護岸マウンド沿いに成立した海草・藻類植生. 南西水研研 報, 31, 13-18.
- 富川なす美・渡邊清一(1990) 岩礁域でのイボイワオウギガニ
 Eriphia smithii MacLeayの食性. 甲殻類の研究, 19, 69–71.
- Yokoyama, H. and Y. Ishihi (2006) Variation in δ¹³C and δ¹⁵N among different tissues of three estuarine bivalves: implications for dietary reconstructions. Plankton Benthos Res., 1, 178–182, 2006.
- 横山隆司・小國嘉之・藤原吉美・中原紘之(2003)環境配慮型岸 壁に形成される生物群集構造の評価.海岸工学論文集,50, 1211-1215.